

Title	レッシングの宗教思想：ライプニッツ, ヴィソヴァティウス, ノイザーを貫くもの
Sub Title	Lessings Religion und „Rettungen" Zu Leibniz Wissowatius und Neuser
Author	渡辺, 直樹(Watanabe, Naoki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.138(309)- 149(298)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0149">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0149</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# レッシングの宗教思想

——ライプニッツ，ヴィソヴァティウス，  
ノイザーを貫くもの——

渡 辺 直 樹

レッシングは、若きベルリン修学時代、既存の宗教的因襲性に懐疑を抱いて以来、生涯にわたり自立的探求を通じて自身の宗教的確信を求めて思索を重ねた。しかしながら、もとより自己の思想を体系化することよりも、常に自己の内部に芽生えた新しい真理への衝動に身を委ねることを欲した彼の性向において、その宗教・神学思想を統一的に把握しようという試みは無益であろう。<sup>1)</sup>レッシングの精神にとって何よりも重要なことは、真理そのものよりも真理へと至った過程であり、問題そのものの正誤よりも、むしろ問題を扱う態度の公正さにあったからである。

ハンブルク国民劇場の失敗後、不遇をかこったヴォルフエンビュッテル図書館司書時代は、1770年5月に始まるが、埋もれた資料の発掘とその整理において、とりわけ彼自身と時代の宗教・神学思想の展開史においてレッシングの批判的精神はその所を得た。この時期、11世紀フランスの神学者で「異端」思想として久しく論争の的でもあったBerengarius Turonensisの手稿を発見し、Leibniz von der ewigen Strafen (1773), Des Anderas Wissowatius Entwürfe wider Dreieinigkeit (1774), Von Adam Neusern, einige authentische Nachrichten (1774)ら三論文を書き、さらに極端な合理主義者ライマールスのキリスト教批判の書をFragmente eines Ungenannten (1774-77)として公表するに至った。

本稿は、ライマールスをめぐる一連の神学論争はさておき、主にライプニッツを導きの系として誕生したこれら三論文を検討し、レッシングの宗

教観のあらわれというよりも、彼の本性に従って、むしろそこに至る過程にあった思想的基盤を明らかにすることを目的とする。

## 1)

18世紀ドイツ神学界にあっては、スピノーザ主義はほとんど「無神論」と同一視されており、社会もスピノーザの上に厳しい評価を下していた。ライプニッツもこの体系を否定し、自己の哲学をスピノーザのそれへの対極として防衛していた。しかしながら例えば、レッシングの *Durch Spinoza ist Leibniz auf die Spur der vorherbestimmten Harmonie gekommen* (1763) という論文も示す通り、彼の体系がスピノーザに本質的源泉をもつという指摘は社会一般の意識の底流に存在していた。18世紀ドイツがライプニッツと彼の哲学に下していた「正統」、「異端」の表裏の評価こそ、時代の宗教・神学思想が抱える問題点を明示している。

若きベルリンの正統派神学者 J. A. エーバーハルトは、1772年 *Neue Apologie des Sokrates* を著し、ライプニッツが *Theodizee* (1710) の中で「永劫の罰」という正統派の教義を擁護したことに対し、「罰は有限である」という合理主義的立場から疑念を表明した。この背景には、もちろん17世紀以来の自然宗教の哲学概念の発展とともにプロテスタントドイツにおける正統派對合理主義との間の闘争がある。問題はキリスト教的ドグマへの固執と聖書のより自由な理性的解釈との対立に始まり、理性と啓示、思想と信仰との対立に転じた。この時代いわば弁神論を通して哲学と神学との啓蒙的和解が課題となって来たのである。<sup>2)</sup>

ともあれヴォルフエンビュッテル図書館の創設に与かって力があつたライプニッツとその哲学への関心と研究を深めていたレッシングは、エーバーハルトに対し *Leibniz von der ewigen Strafen* をもってライプニッツの側に立って反論した。とりわけその典拠としたのが、16世紀から17世紀の初めにその宗教活動によって名前を知られたアルトドルフのソツィニ主義者、E. ソナーの著作に関するライプニッツの小論文である。ソナーは、イエス・キリストの神性を否定する点でアウリス派と共通項をもつ反三位

一体論者であったが、ライプニッツは彼の著作集を企画し、興味ある正統派弁護の緒言を書いた。この未刊の小論をレッシングは時宜を得てヴォルフエンビュッテル図書館で発見したのである。つまりレッシングは、「異端者」ソナーに対するライプニッツの反論を基に、「永劫の罰」の教義を肯定し、ライプニッツその人をも「正統主義者」として擁護した。しかしながらレッシングの意図は、実のところこの緒言の存在を世間に知らしめることの方にあり、ルター正統派の教義についてのライプニッツの理論的証明を全面的には承認していた訳ではなかった。

レッシングは、この意味で非哲学的問題、つまり神学を哲学的に論じたライプニッツの弁神論を、哲学的世界と神学的世界の統一を目指した実験的試みとして評価はしても、「両世界の狭間は本質的に未解決のままに終わっている<sup>3)</sup>」とみなしていた。ライプニッツは、キリスト教的な神概念を基礎とした神学体系を打ち樹てようとした点で前進的ではあったが、その普遍主義的精神においてカトリック的教義をも併せ許容する思想的広がりをもっていた。このライプニッツ的「調和」の精神は、カトリックとプロテスタントとの歴史的和解への努力に向かったとはいえ、何よりもプロテスタント的な個人の信仰と良心の自由、個人の自律の原則に支えられているものであった。レッシングが、「ほとんど知られてはいないが……完全に理解される価値がある<sup>4)</sup>」と述べたライプニッツの「神学体系」は、ゼムラーやエーバーハルトら啓蒙神学から、表面的には批判よりもむしろ肯定的論拠たり得る性格をもつものであった。18世紀ドイツ・プロテスタントは、「永劫の罰」を初め、「原罪」や「三位一体」をめぐる伝統的キリスト教的ドグマをくすぶる火種として内包しつつ、70年代において啓蒙神学派と正統派との間の宗教論争へと燃え上がる必然的理由を内から有していたのである。

レッシングは、信仰上の問題を哲学的に批判し、哲学と神学との間の「隔壁を取り払ってしまい、理性的キリスト教徒にするという口実の下で私たちを全く非理性的哲学者<sup>5)</sup>」にしてしまう啓蒙神学の合理主義的傾向に反対し、かつ一方ではまた宗教の真理の基盤を聖書の文字の上にも置きい

た硬直的正統派にも反対したが、理性を「批判」の基準とする態度においては啓蒙神学に倣い、個人の内的経験を基準に信仰を内面化する主観主義的精神においてはライプニッツの立場と正統教義を支持した。そしてここに、宗教的真理は頭で考えるものではなく、心の内に発する人間本来の感情に根ざすものであり、こうした信仰態度こそ宗教の根源的性格であるという、レッシングの核心的思想を読みとることができる。

## Ⅱ)

18世紀ドイツの多岐に分かれる思想の流れの下で、7年戦争とその後の高揚した精神的雰囲気は、啓蒙主義思想への親近性において、半世紀近くも忘れ去られていたドイツ哲学の祖、ライプニッツを改めて蘇えらせた。レッシングと彼の生涯の友人、M. メンデルスゾーンも早期にライプニッツ研究に関係した人々であった。彼らは共同の著作である *Pope, ein Metaphysiker* (1755) において、ポープがスタティックな世界に真理の礎を求める形而上学者であるのに対し、ライプニッツがダイナミックな世界を思想構築上の礎とした「発展」の理念をもってその哲学の原理とした、ということを証明しようとした。そしてレッシングは、このライプニッツの思考形式に、とりわけ「発展」の概念に彼の神学的思索の多くを負っている。若き頃の教訓詩 *Religion* (1749) では、世界の悪に対する神への弁明において、悪の根源としての「自然」と善の根源としての「理性」とを区別し、この両者間に横たわる厳然とした溝を意識せざるを得なかった。しかしながら晩年の *Die Erziehung des Menschengeschlechts* (1777~80) の教育理念が明示するように、この乖離は道徳の完全さという高みにおいてついに発展的に解消されるものである。この思想も、ライプニッツのダイナミックな思考形式による「発展」の概念に多くの示唆を得て自らのものとするのできたのである。<sup>6)</sup> レッシングは、*Leibniz von der ewigen Strafen* でそのライプニッツ的概念を次のように規定した。

私はまず体系的で偉大なる真理を示さなければならない。ライプニッ

ツはそれを顧慮し永劫の罰の平易な理解に資するための適切なことば  
を見い出した。……世界には連続のないもの、永遠に連続のないもの  
は何もない、という命題しかない。<sup>7)</sup>

一般に相反対概念である「自然」と「理性」、「善と悪」、「完全と不完全」が世界にアプリアリに普遍的絶対的に存在するのではなく、人間個人の精神の発展過程のうちにアポストテリオリに連続的相対的に存在する、というレッシングの思想的確信において、彼の伝統的キリスト教的ドグマに対する理解の方法もはっきりとみてとられる。

レッシングは、同時代の宗教的精神潮流におもねることを忌避し、この点でエーバーハルトが指弾したように「あらゆる党派に支配的な命題に自己の哲学を合わせた」のではなく、逆に「それらを自己の哲学に合わせようとした」<sup>8)</sup>ライプニッツの神学的態度へ信頼を寄せ、彼を真の正統主義者として弁護した。また他方、反三位一体を主張したソツィニ派ソナー、ユニテリアン派ヴィソヴァティウス、ノイザーら「異端的」宗教家の「救済」を志向したこととの間にある矛盾は、一見彼の宗教的姿勢の一貫性を疑わしめるものでもあった。レッシングを正統派というよりも、むしろ隠健ではあるが啓蒙神学派とみなしていた同時代の人々にも、このことは理解し難い一面であった。例えばGöttingische Anzeige誌によれば「L氏はあれこれライプニッツのことを良としているが妙なことはないか。彼が正統信仰のために闘っている気になっているとは」<sup>9)</sup>と。しかしレッシングのこうした姿勢は、彼の生涯の交際相手であったM. メンデルスゾーンが「迫害された教義に対しては、たとえそれが好ましいものであろうとなかろうと全力を貸す」ということは「むしろ彼の性格であった」<sup>10)</sup>と述べたように何ら不思議なことではない。むしろここに読みとられるべきは、宗教の信仰を合理主義的理性を通して新しく創り出そうとする傾向への反抗であり、また化石と化したスコラ的ルター主義への抵抗であり、そしてこれらに対置されるべき心情を通しての信仰という内面化への宗教的努力であった。

ライプニッツの哲学と思考形式は、レッシングの宗教・神学思想の発展に直接的影響を与えたというよりも、その思索のための依り所として、宗教的信仰の思想を彼の内部に促進し得たという点で、さらにスピノーザの学説へと目を開かせたという点で導きの糸となったといえることができるのである。<sup>11)</sup>

### Ⅲ)

宗教は内なる真理であり、信仰は神学から独立し、良心の問題であるという内面化への努力において、ヴォルフエンビュッテル時代のレッシングは、「永劫の罰」、「三位一体」のキリスト教が伝統的に培って来たドグマを考察対象としてルター正統信仰に直接関与することになった。

聖三位一体の問題は、レッシングにとってDas Christentum der Vernunft (1753) からDie Erziehung des Menschengeschlechtsに至るまでの神学的テーマのひとつであり、彼は一貫してその思想内容を支持した。ヴィソヴァティウスの反三位一体論にライプニッツのVerteidigung der Dreieinigkeit auf Grund neuer logischer Erfindungenを対置し、反三位一体論者ノイザーの矛盾ともいえる「救済」の試みは、正統ルター派との神学論争を余儀なくされた過程にあったレッシングの宗教的世界観と思想的基盤を併せ示すものである。

もともとプロテスタントの牧師の子として神学と深くかかわる運命を担っていたレッシングにとって、プロテスタンティズムは人格の本質に根ざすものであり、正統信仰は本来自然なことであった。そして「文字は精神ではなく、<sup>12)</sup>聖書は宗教ではない」という信念を敷衍化する意味で、ルターが彼にとって「因襲の重圧から開放し、堪え難い文字の束縛から救い出してくれた偉大な人間」<sup>13)</sup>であり、一方同時代のルター像は「正統派なるもの」によって誤解され歪められたものと写った。「ルターの精神は、いかなる人間も真理の認識においては自分自身の考える通りであること妨げられてはならないということを絶対的に要求している」<sup>14)</sup>というレッシングのことばは、既存の哲学・神学思想を超えたところの信仰者の態度の正当性

を主張しているものに他ならない。宗教「批判」の表面のみを解釈すれば、確かにレッシングは合理的論拠に依って立つ合理主義者とみられるし、一方その精神に立ち入って解釈すれば、確かに啓蒙主義の合理主義と対決し、非合理的要素に重きを置く思想家としてみなされるのである。<sup>15)</sup> この意味で伝統的キリスト教的ドグマに対する考えも、レッシングの思索におけるこうした二重の自己論理を踏まえて初めて理解されるものといわなければならない。

三位一体とは、神が三位、つまり父と子と聖霊より成り立っており、神は唯一の絶対者でかつ世界の創造者であるという信条である。このキリスト教の基本的信仰にかかわる命題が、つとに歴史的に論争対象となり、「正統」、「異端」を分かち基準ともなってきたことの理由は、唯一神教の思想と神の子キリストによる救済の信仰との一致が神学的に整合性をもち得るか、という点にあった。本来、父と子と聖霊の三位が一体であるという教理は、キリスト教的な唯一神教では論理的証明は不可能であり、信じることはできても理解することができない矛盾といえるものであった。ヴィソヴァティウスは、その鋒先をキリストの神性に向けた反三位一体論者であった。つまり神の父の神性と神の子のそれは同一であってはならない、と。<sup>16)</sup>これに対しライプニッツは、神の子は神としてではなく事実子として存在し、父と子と聖霊が一体となるに至って初めて神性が獲得され、神として信仰されると説いた。<sup>17)</sup>一方また啓蒙神学によれば、神は父と子と聖霊が一体となった神ではなく、世界の創造者ではあっても現世の外部に存在し、人間の道徳的向上にのみ指針を与えるだけの無力な存在となさしめられている。このことによってキリスト教的神は、その覆いを剥がされ、普遍的絶対的概念で置き換えられる実体とまでに化してしまった。そして神の存在と摂理は、世界の因果、法則、合目的調和により理論的には証明可能なところにまで極端に前進してしまったのである。

ライプニッツの三位一体についての新しい論理も、こうした時代の脈絡の下で捉えられる。ライプニッツは、TheodizeeでP. ベールの合理的に過ぎる世界観を批判したとき、主知主義的神概念を弁護し、自己の哲学的世



界を守ろうとした点で、時代の宗教的危機を敏感に嗅ぎとっていた。「十分な注意力とある程度悟性を備えた人間ならば普遍的論理の規則性を利用する術を心得ており、真理に反する訳のわからない非難にも対応できる<sup>18)</sup>」と確信することによって、三位一体の教義を始め危胎に瀕した伝統的宗教的世界観を保護しようとした。レッシングは、Wissowatiusにおいてライプニッツのこの意図を正しく理解していた。そして「神が、神のみが、神自身が世界を創造した。神はいかなる被造物をもってしても世界を創造させはしなかった。被造物は何も創造し得ない。最も完全なる被造物は世界の一部でなければならない<sup>19)</sup>」という神の全能に対する信仰において弁神論にも接近した。レッシングの神学的思索が、彼の精神的成長を跡付ける歴史ではなく、その論理体系の概要を暗示するに留まる断片的なものでしかなかったとしても、宗教・神学「批判」にみられる集中的自己主張の内実を検討すれば、そこには神の解釈ではなく、むしろ神学と哲学とに一線を画し、宗教の哲学的側面を明らかにしようという意図がみてとられる。

レッシングは、聖書の物語りを学問的批判的に解明することは宗教的信仰を抹殺することになるとは考えなかったし、またその発生と経過を考察しても尽くされる訳ではないことも理解していた。ただ彼は聖書と宗教との間の区別を哲学的課題として捉えていたのである。

啓蒙神学者たちの合理的聖書批判、キリスト教的ドグマ批判は、レッシング的な「理性的真理」や「内的真理」とはおおよそ次元を異にするものであった。レッシングにとってこうした合理主義的傾向は、宗教の内的真理とその歴史的知識、換言すれば「必然的理性的真理」と「偶然的歴史的真理」とを混同する愚であると思われたのである。レッシングは理性的認識ではなく、いわば直接的洞察による精神を通じての信仰という宗教的確信において、正統派の伝統的キリスト教的ドグマが存続すべき永遠の真理をもっているに違いないと信じた。

Das Christentum der Vernunftで具体的に提起されたレッシングの三位一体についての考えは、いわゆる合理主義の理性中心主義からこの教義の神秘性を擁護し、三位一体教義が本来的に担って来た宗教的精神を宗教の

歴史から救済しようとするものであった。

神と子との間の一致が聖霊であり……この一致はまた神である。父が神でなければ、そして子が神でなければ、それは神でないであろう。

もしこの一致がなければ二つとも神ではなかろう。つまりこの三位は一つである。<sup>20)</sup>

レッシングの三位一体論の基本にある思想は、啓蒙神学の聖書批判にあるそれでもなく、また宗教的真理を聖書の文字にのみ求めた正統派にあるそれでもなく、人間の宗教性に対する深い洞察に基づくものである。三位一体に対するレッシングの確信は、宗教の真理に対すると同様個人の内的体験のうちにあり、世俗の伝統や外的強制から開放されていないことにはもちろんのこと、科学的真理を証明するための認識的理性によっても動かされることはない。外に向かって自己を主張するものではなく、むしろ内に向かって沈潜するこのような論理は科学的に論証が不可能であるとしても、しかしながら確かに体験する人間のうちに存在するものなのである。

W. デイルタイは、レッシングの正統信仰へのかかわり方を「永劫の罰」、「三位一体」、「原罪」などの伝統的にキリスト教が担って来たドグマを、彼自身の宗教観の形成過程において独自に解決し得た結果である<sup>21)</sup>、と述べたが、このことは、信仰と思想、理性と啓示、哲学と神学との相互関係をキリスト教の根源的理念と時代思潮とを顧慮しつつ、客観的評価はどうあれ、彼自身概念的・神学的に整理し得たことによって初めて可能となったことを明らかにしている。そしてキリスト教信仰の正統性とは、聖書の合理的解釈でもなく、また聖書への固執でもなく、すべての宗教的因襲や束縛から独立した、個人の自立的精神の上にのみ成立するものであることをレッシングは、ヴォルフエンビュッテルにおける外への宗教的闘いのうちに認識し得たのである。

#### N)

18世紀の宗教思想の近代化というプロセスにおいてレッシングがドイツ精神の展開史に果たした寄与は特定できるものではないし、また決定的意義を有するものでもなかろう。しかしながら、異端者の「救済」を初め、埋もれた資料の発掘、宗教・神学批判に含まれるレッシングの活動は、彼自身の真理を求める内的衝動に由来するとはいえ、社会的には同時代の宗教的潮流と相対立するものであった。レッシングは、啓蒙主義の合理的神学にも与せず、また一方正統ルター派のドグマ的態度をも忌避した。そして宗教が本来的に有する真理と存在意義を既成の論理体系の枠内ではなく、独自の宗教的確信に基づいて捉え直そうとした。それは個人の内的経験に基づく信仰を通しての、いわば人間の魂の発する論理であり、法則によらない精神の内的活動を重視する主観主義的傾向においてピエティスムスの精神潮流とも内的結び付きを示している。神学論争においてキリストの真の精神を蘇らせようとしたレッシングの宗教的努力の基底にあったものは、まさに神学者としてのそれではなく、この信仰者としての精神に貫かれていたのである。

ヴォルフエンビュッテル時代、神、世界、人間について機会をとらえたレッシングの哲学・神学的思索は、正統派の伝統的キリスト教的ドグマの問題に、宗教と聖書とを区別し、信仰を心情を通してより内面化しようという努力において彼なりの解答を与えることができた。その際、レッシングは、ライプニッツが異端に反対し正統派を弁護したその哲学的論理体系を検討し、そこに自己の思想的基盤の多くを負った。

レッシングの実際の宗教観のあらわれが、正統信仰か啓蒙神学か、内在思想か超越思想か、相反的思考か体系的思考か、各々どちらに重きが置かれているか、またどちらに重きを置いて解釈すべきかは、この場合重要ではなかろう。何よりもレッシングにおいては結果ではなく、真理に至る過程、直面したアポリアを克服する過程こそ意義をもつものであったからである。レッシングの宗教的確信が、合理的証明ではなく、感情的ともいえ

る人間の宗教性への洞察に基づくものであったことを考慮するとき、神学論争を超えたところに宗教を人間精神の発展に不可欠なものとし、レッシングの思想をもまた読みとることができる。そして一義的には規定し難いとはいえ、その論理体系の外延が私たちの内面において統合されるとき、レッシングの宗教思想は確かにひとつの世界観へと高められた宗教哲学としての性格を獲得しているといわなければならない。

## 注

- 1) Karl S. Guthke: Der Stand der Lessing-Forschung. Ein Bericht über die Literatur von 1932–62, Stuttgart 1965.
- 2) 良知 力『レッシングのヴォルフエンビュッテル時代』 一稿論叢 第31巻第3号, 東京 1950, 51ページ.
- 3) Wilhelm Totok: Theodizee bei Leibniz und Lessing. In: Beiträge zur wirkungs- und rezeptionsgeschichte von Gottfried Wilhelm Leibniz, hrsg. v. Albert Heinekamp, Stuttgart 1986, S. 179.
- 4) Gotthold Ephraim Lessing, Werke, hrsg. v. Herbert G. Göpfert 8 Bde. München 1970–79, 8. Bd. S. 547. u. S. 739.
- 5) Lessing, Werke 7. Bd. S. 801.
- 6) W. Totok, a. a. O., S. 182.
- 7) Lessing, Werke 7. Bd. S. 187.
- 8) ebda., S. 180.
- 9) ebda., S. 796.
- 10) Moses Mendelssohn: Gesammelte Schriften. Leipzig 1844, 2. Bd. S. 367.
- 11) 拙稿『レッシングのスピノーザ主義(1)』 宇都宮大学外国文学研究会「外国文学第38号」 1990. 『レッシングのスピノーザ主義(2)』 宇都宮大学教養部「研究報告第23号」 1990.
- 12) Lessing, Werke 8. Bd. S. 136.
- 13) ebda., S. 126.
- 14) Heinrich Schneider: Lessing. Zwölf biographische Studien. Bern 1951, S. 230.
- 15) 小泉進『レッシング研究の一断面』, 上智大学「ドイツ文学論集13」 東京 1976, 44ページ.
- 16) Lessing, Werke 7. Bd. S. 203–216. u. S. 818–827.
- 17) ebda.
- 18) ebda., S. 217.

- 19) Lessing, Werke 7. Bd. S. 221.
- 20) ebda., S. 279.
- 21) Wilhelm Dilthey: G. E. Lessing. In: Das Erlebnis und die Dichtung ,Stuttgart 1957, S. 56.